『論語義疏』校定本及校勘記

―何晏集解序疏―

影山輝國

本稿は、『論語義疏』校定本及校勘記―皇侃自序（実践女子大学文芸資料研究所『別冊年報X』二〇〇六年三月）に続く、何晏集解序疏の校定本及校勘記である。校定本は武内校本に倣い、鈔本のうち最も多数を占める疏文小字双行、毎葉九行、毎行二十字の体裁とした。校勘に使用したのは以下に掲げた三十六種の鈔本の内、何晏序疏を缺く1・8・13・14・22・24・27・30・32・36の十種を除く二十六種である。[注(一)] そのほか、根本刊本、武内校本を比較材料として、文字の異同を示してある。

昨年、皇侃自序の校定本及校勘記を発表した後、総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻博士課程の高田宗平君から更に二種の鈔本があるとの教示を得た。一つは山口県の萩市立萩図書館蔵の十巻五冊本（34）、今一つは足利学校遺蹟図書館蔵の第四巻のみの一冊本である。早速現地に行って調べてみると、前者は萩の明倫館第六代学頭であった繁澤豊城の玄孫寅之助が明治四十三年七月十六日に萩図書館に寄贈したものあり、江戸後期の鈔本であ

ると思われる。[注(一)] 後者は足利本（9）の第四巻を、文字のかすれまで工夫して示すなど丁寧に模写したもので、長澤規矩也編『補訂　足利学校遺蹟図書館古書分類目録』では、明治期のものとしている。前者は今回の校勘に利用したが、後者は模写のため校勘に用いてはいない。[注(二)]

また、池田秀三京都大学大学院文学研究科教授のお力添えで、京都大学附属図書館蔵の重文本（1）を実見して、書誌を取ることができた。[注(四)]

特に記してお二方に感謝の意を表したい。

台北の国立故宮博物院図書文献処には楊守敬が日本で購得した七種の鈔本が所蔵されるが、昨年（二〇〇六年）三月の訪台の時には表紙修補中のため見られなかった故宮本（24）を、今年の一月に再度訪台して調べる事ができた。これでマイクロフィルムのみ斯道文庫に存在し、原本所蔵者不明の桃華斎本（22）を除き、現在所在の判明している三十五種すべての鈔本を実見し得たことになる。

武内義雄は『論語之研究』[注(五)] のなかで「一體異本の對校は數の多きを尊ぶものでない、質のよい材料を系統だてて取扱つて尤も正しい本文を得ることを尊ぶのである。從つて雑然とあつめられた多數の本よりは系統立てられた二三の本の方が遙かに效果的である」と言われている。全く同感である。左に列挙した三十六種類の鈔本のなかには、新出の市島本（33）、萩図書館本（34）などのように筆写した人の知識不足から多くの写し間違いをしていると疑われるものが存在することも事実である。正しい本文を得るためだけならば、質のいい鈔本だけを対校すればよいであろう。しかし、写された鈔本と写した鈔本との間のいわば「親子関係」や、同一鈔本を写した鈔本同士のいわば「兄弟関係」を明らかにするためには、すべての鈔本の異同を調べざるを得ないのである。

注

（一）この内、塙本（20）は何晏の序文のみで皇侃の疏文はない。また、久原本（17）には二種の何晏集解序疏が附いている。校勘記の略号として、巻頭のものを［久］、論語発題の後にあるものを［久］と表示した。

（二）この鈔本には皇侃自序は無く、何晏集解序疏から始まっている。

（三）蓬左本（15）にも江戸期に転写した第一巻があるが、詳しく調べてみると誤写の箇所があるため、校勘には原鈔本を用い、転写本は補助的にしか用いていない。

（四）各鈔本の書誌・解題については、各鈔本同士の関係がある程度判明してから発表したい。

（五）『論語之研究』（昭和十四年十二月四日　岩波書店刊）第一章の四「校勘の方針」。

論語義疏鈔本

1　［重］　論語義疏　存巻二、四―八　六冊　清原良兼筆か　重要文化財　船橋家旧蔵　京都大学附属図書館蔵　「重文本」と略称する　9行20字

2　［應］　論語義疏　十巻十冊　応永三十四年写　与謝郡金谷寺旧蔵　前田育徳会尊経閣文庫蔵　「応永本」と略称する　9行20字

3　［德］　論語義疏　十巻五冊　第一、第四冊は宝徳三年写　第二、三、五冊は慶長元和補鈔　徳富蘇峰成簀堂文庫旧蔵　お茶の水図書館蔵　「宝徳本」と略称する　一、四冊10行25字　二、三、五冊8行19字

4　［文］　論語義疏　十巻五冊　文明九年写　西本願寺写字台旧蔵　龍谷大学大宮図書館蔵　「文明本」と略称する　6行20字

5 國　論語義疏　十巻五冊　文明十四年奥書本の写し　鹿島則文旧蔵　国立国会図書館蔵「国会図書本」と略称する　9行20字

6 槻　論語義疏　十巻五冊　文明十九年写　周防国明倫館旧蔵　大槻文彦旧蔵　安田善次郎旧蔵　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵「大槻本」と略称する　9行20字

7 延　論語義疏　十巻九冊（巻第十缺）延徳二年写　江風山月荘稲田福堂旧蔵　大東急記念文庫蔵「延徳本」と略称する　9行20字

8 天　論語義疏　十巻八冊（巻第九、十缺）天文十年、十四年写　岡田真旧蔵　慶応義塾図書館蔵「天文本」と略称する　9行20字

9 足　論語義疏　十巻十冊　室町写　重要文化財（別に第四巻を明治期に模写せる一冊あり）足利学校旧蔵　足利学校遺蹟図書館蔵「足利本」と略称する　9行20字

10 清　論語義疏　十巻五冊　室町写　清熙園阪本準平旧蔵　天理大学附属天理図書館蔵「清熙園本」と略称する　9行24字

11 神　論語義疏　十巻十冊　室町写　江藤正澄旧蔵　神宮文庫蔵「神宮本」と略称する　8行20字

12 勝　論語義疏　十巻十冊　室町写　宝勝院芳郷光璘手沢本　森立之旧蔵　大槻文彦旧蔵　安田善次郎旧蔵　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵「宝勝院本」と略称する　9行20字

13 林　論語義疏　十巻七冊（巻第五、六缺）室町写　小嶋寶素旧蔵　林泰輔旧蔵　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵「林本」と略称する　一～四冊9行16字　七～九冊8行20字

14 書　論語義疏　十巻五冊　室町写　宮内省図書寮旧蔵　宮内庁書陵部蔵「図書寮本」と略称する　9行20字

15 蓬 論語義疏 十巻五冊 室町写（別に第一巻を江戸期に転写せる一冊あり） 神村忠貞旧蔵 名古屋市蓬左文庫蔵 「蓬左本」と略称する 9行20字

16 風 論語義疏 十巻五冊 室町写 江風山月荘稲田福堂旧蔵 安田善次郎旧蔵 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵 「江風本」と略称する 9行20字

17 久 論語義疏 十巻十冊（巻第四缺） 室町写 江風山月荘稲田福堂旧蔵 久原文庫旧蔵 大東急記念文庫蔵 「久原本」と略称する 9行20字

18 青 論語義疏 十巻六冊 室町写 青淵渋沢栄一旧蔵 都立中央図書館蔵 「青淵本」と略称する 9行20字

19 寺 論語義疏 十巻十冊 室町写 読杜草堂寺田望南旧蔵 楊守敬旧蔵 台湾故宮博物院蔵 「寺田本」と略称する 9行20字

20 塙 論語義疏 十巻五冊 室町写 和学講談所塙保己一旧蔵 楊守敬旧蔵 台湾故宮博物院蔵 「塙本」と略称する 9行20字

21 溯 論語義疏 存巻第一、四、七、八 三冊 巻第一は室町写、巻第四、七、八は江戸写 有馬氏溯源堂旧蔵 楊守敬旧蔵 台湾故宮博物院蔵 「溯源堂本」と略称する 8行20字

22 桃 論語義疏 十巻五冊 室町写 大徳寺多福庵旧蔵 桃華富岡謙蔵令息益太郎旧蔵 現所蔵者不明 「桃華斎本」と略称する 9行20字

23 上 論語義疏 十巻十冊 室町江戸間写 上原氏旧蔵 木村正辞旧蔵 東洋文庫蔵 「上原本」と略称する 8行20字

24 故 論語義疏 存巻第四 一冊 室町江戸間写 楊守敬旧蔵 台湾故宮博物院蔵 「故宮本」と略称する 7行21字

25 東　論語義疏　十巻五冊　江戸写　青洲渡辺信旧蔵　東京大学総合図書館蔵　「東大本」と略称する　9行20字

26 京　論語義疏　十巻九冊（巻第四缺）江戸写　清原宣條旧蔵　京都大学附属図書館蔵　「京大本」と略称する　8行20字

27 九　論語義疏　十巻五冊　江戸写　九折堂山田業広旧蔵　楊守敬旧蔵　台湾故宮博物院蔵　「九折堂本」と略称する　9行20字

28 戸　論語義疏　十巻五冊　江戸写　久原文庫旧蔵　大東急記念文庫蔵　「久原文庫一本」ともいわれるが、「江戸本」と略称する　9行20字

29 泊　論語義疏　十巻十冊　江戸写　泊園書院藤沢南岳旧蔵　関西大学図書館蔵　「泊園書院本」と略称する　9行20字

30 米　論語義疏　十巻十冊　江戸写　米沢藩上杉家旧蔵　東洋文庫蔵　「米沢本」と略称する　8行20字

31 盈　論語義疏　十巻五冊　江戸写　盈進斎旧蔵　楊守敬旧蔵　台湾故宮博物院蔵　「盈進斎本」と略称する　9行20字

32 静　論語義疏　存巻第二　江戸写　伊澤蘭軒旧蔵　静嘉堂文庫蔵　「静嘉堂本」と略称する　9行20字

33 市　論語義疏　十巻五冊　弘化二年写　新潟県新発田市市島酒造蔵　「市島本」と略称する　10行18字

34 萩　論語義疏　十巻五冊　江戸後期写　繁澤寅之助旧蔵　萩市立萩図書館蔵　「萩図書館本」と略称する　9行20字

35 新　論語義疏　十巻四冊　江戸末明治初写　新井氏旧蔵　楊守敬旧蔵　台湾故宮博物院蔵　「新井本」と略称する　一～三巻、七～十巻10行20字　四～六巻8行20字

36　三　論語義疏　十巻五冊　明治末写　三宅氏旧蔵本の写し　前田育徳会尊経閣文庫蔵　「三宅本」と略称する
10行20字

根　根本武夷校正『論語集解義疏』　寛延三年刊十冊本（都立中央図書館青淵論語文庫蔵）

武　武内義雄『論語義疏』（校本）　武内義雄全集第一巻（昭和五十三年角川書店刊）

校勘の方針

一、用いる字体については原則として正字（康熙字典体）に準拠するが、武内氏の「凡そ底本に用いる所の異字俗字は、今も習用する者は略其の旧を存し、罕に用いる者は改めて正字と為す」という方針はできる限り生かす。ただし、「今も習用する者」と「罕に用いる者」との判断は武内氏と異なる場合がある。

二、一点一画の相違でも別字となるものは校勘の対象とした。

三、繰り返し符号が用いられている場合は、相当する文字に置き換えて表示した。

四、文字の脱落を行末で補っているものは、筆写の際、脱落に気附いて補ったものと考え、一々その旨を注記しなかった。

五、文字の脱落を該当箇所の脇などに補っているものは、その補記が後世のものと判断される場合に限り、脱落の注記をした。

六、「木偏」と「手偏」、「竹冠」と「草冠」、また「己」と「已」と「巳」、「于」と「干」、「未」と「末」、「傳」と「傅」、「卿」と「郷」など、鈔本において特に区別が困難であるものは校勘の対象からはずした。

七、虫損等による不鮮明な文字は、原則として校勘していない。

何晏集解序疏校定本及校勘記

論語序　何晏集解

敍曰。漢中壘東西南北四人有將軍耳。北方之夷官也。校尉考古以奏事官也。校尉劉向言。魯論語二十篇。皆孔子弟子記諸善言也。劉向者劉德之孫。劉歆之子。前漢時爲中壘校尉之官。若今皇城使也。其人博學經史。孔子沒後而弟子共論而記之也。初爲魯人所學。故謂魯論也。又曰。劉者氏。向者名也。中壘官名也。校尉者官也。校者數也。尉安也。校數中壘之軍衆而安之。故曰校尉也。漢世學者。又有魯論齊論古文論三本之異也。魯人所引論語謂之魯論語。則有二十篇。如今之題目次第也。太子太傅夏侯勝。前將軍蕭望之。丞相韋賢。及子玄成等傳之。夏蕭及韋賢父子凡四人。初傳魯論於世也。又曰。太子者漢武帝之太子衞也。夏侯者氏。勝者名也。太子太傅夏侯勝。常山都尉龔奮

1　2　3　4　5　6　7　8　9

也。齊論語二十二篇。其二十篇中章句。頗多於魯論。猶是弟子所記。而爲齊人所學。故謂爲齊論也。既傳之異代。又經昏亂。遂長有二篇也。其二十篇雖與魯舊篇同。而篇中細章文句。亦多於魯論也。又曰。齊論者齊人所引論語謂之齊論。齊論則其中二十篇前題目次第與魯論不殊。以學而爲時習也。章句者古之解書之名也。分經文章句而說之也。瑯琊王卿。及膠東庸生。昌邑中尉王吉。皆以教授之。此三人傳齊論。亦用持教授於世也。故有魯論。有齊論。夏侯等四人傳魯。王等三人傳齊。並行於世。世故有魯齊二論雙立也。又曰王者氏也。卿者尊之號也。不審名也。中尉者佐於中壘校尉者也。故曰中尉也。王者亦氏。吉者名。瑯琊王卿。及膠東庸生。昌邑中尉王吉。以教授也。魯恭王時。嘗欲以孔子宅爲宮。壞得古文論語。漢景帝之子。名餘。封魯。故謂魯恭王

10 11 12 13 14 15 16 17 18

也。好治宮室。壞孔子舊宅以廣其宮。於壁中得古文論語。皆科斗文字也。又曰。古文者則魯恭王壞孔子之宅於屋壁所得也。案此論語似孔子撰集。便已其異本。亦爲難解。將亦遇秦焚書。學士解散。失其本經。口所授。故致此異邪。

齊論有問王知道。多於魯論二篇。既有三論。文皆不同。齊論長有二篇。一曰問王。二曰知道。是多魯論二篇也。又曰。齊論下章有問王知道二篇。二篇內辭句與魯論亦微異也。

古論亦無此二篇。齊非唯長魯論二篇。亦長於古論。古論故亦無此問王知道二篇也。曰。古文則篇名與魯論略同準也。又

分堯曰下章子張問以爲一篇。古論雖無問王知道二篇。而分堯曰後子張問於孔子曰如何斯可以從政矣。又別題爲一篇也。

有兩子張。一是子張曰士見危致命爲一篇。又一是子張問孔子從政爲一篇。故凡論中有兩子張篇也。

凡二十一篇。古論既分長一子張。故凡成二十一篇也。

凡二十一篇。而次第大不同。以鄉黨爲第二。以雍也又曰。有孔安注。無傳學。篇次第不與齊魯同。古文爲第三。二十篇而內辭句亦大倒錯。其微子篇無巧言章。子罕篇無主忠信章。憲問篇無君子恥其言章。述而篇無於是日哭則不歌子不食於喪側章。鄉黨篇無色斯舉矣山梁雌雉時哉子路供之三臭而立作文。其餘甚多也。篇次不與齊魯論同。古論篇次既不同齊。又不同魯。故云不與齊魯論同也。安昌侯張禹本受魯論。兼講齊說。善者從之。號曰張侯論。禹初學魯論。又雜講齊論。於二論之中。擇善者抄集。別爲一論。名之曰張侯論也。又曰。侯者爵也。張者氏也。禹者名也。安昌侯張禹從建受魯論。兼說齊論。又問庸生吉等。擇其善者而從之。號曰張侯論也。爲世所貴。此論既擇齊魯之善。合以爲一論。故世之學者皆貴重於張侯論也。苞氏周氏章句出焉。苞氏苞咸也。周氏不悉其名也。章句者注解。因爲分

28 29 30 31 32 33 34 35 36

斷之名也。苞周二人注張侯魯論。而爲之分斷章句也。古論唯博士孔安國爲之訓說。訓亦注也。唯孔安國一人注解於古論也。又曰。孔安國者漢武帝時之人也。訓說者文字解之耳。而世不傳。世人不傳孔注古文之論也。至順帝之時。南郡太守馬融亦爲之訓說。後有馬氏。亦注張禹魯論也。漢末。大司農鄭玄就魯論篇章。考之齊古。以爲之注。鄭康成又就魯論篇章。及考校齊古二論。亦注於張論也。又曰。注者自前漢以前解書皆言傳。去聖師猶近。傳先師之義也。後漢以還解書皆言注。注已之意於經文之下。謙不必是之辭也。近故司空陳羣。太常王肅。博士周生烈。皆爲之義說。此三人共魏人也。亦皆爲張論作注說也。又曰。近者近今之世辭也。故者古爲司空而今不爲。故曰故司空也。太常者掌天下之書官名也。義說者解

37 38 39 40 41 42 43 44 45

其義也。前世傳受師說雖有異同。不爲之訓解。自張侯之前。乃相傳師受不同。而不爲注說也。中間爲之訓解。至于今多矣。中間謂苞氏孔周馬之徒。至于今謂至魏末何平叔時也。多矣言注者非一家也。所見不同。互有得失。既注者多門。故得失互不同也。今集諸家之善說。記其姓名。此平叔用意也。叔言多注解家互有得失而已。今集取錄善者之姓名。著於集注中也。有不安者。頗爲改易。若先儒注非何意所安者。則何偏爲改易下己意也。頗猶偏也。名曰論語集解。既集用諸注以解此書。故名爲論語集解也。又曰。集解者魏末吏部尚書何晏又因魯論本文。集此七家。兼取古文孔安國。及下己意。名曰集解。光祿大夫關內侯臣孫邕。光祿大夫臣鄭仲。散騎常侍中領軍安鄉亭侯臣曹義。

46 47 48 49 50 51 52 53 54

侍中臣荀顗。尚書駙馬都尉關內侯臣何晏等上。記此

孫邕等五人。同於何晏。共上此集解之論也。散騎又曰。光祿者掌祴祿之官之名。故曰光祿大夫也。

古以四馬爲乘也。漢以來而散之爲騎也。常侍中者官掌內仕之官長也。領軍世上書之官長也。駙馬掌

馬官名也。都尉兼總諸壘中之軍衆而安之。故曰都尉。尉安也。何晏。孔安國。馬融。苞氏。周氏。鄭玄。陳羣。

王肅。周生烈義。示己意思。故謂之集解也。

59 58 57 56 55

1 **何晏集解**—延 青 塙 溯 上 戶 新 無「何晏集解」四字。應 足 久「何晏集解」四字在第二行。國 盈 第一行「何晏集解」下有「皇侃疏」三字。根 第一行有「論語集解序」五字、第二行有「魏何晏撰」四字、第三行有「梁皇侃義疏」五字、第四行有「日本根遜志校正」七字。

2 **東西南北云云**—久「東西南北」至「奏事官也」二十六字在「校尉」下。根 刪此二十六字。今暫從武內校勘記而不妄刪削。

3 **魯論語二十篇**—市 脫「魯」。**皆孔子弟子**—市「皆」誤作「昔」。久 上「弟」作「才」。

4 **劉德之孫劉歆之子**—萩「劉德」誤作「列德」、「劉歆」誤作「列歆」。根「劉德」改作「辟彊」、「劉歆」改作「德」。武內校勘記云「疑孫當作子、子當作父」或是、今不妄改。**若今皇城使也**—萩「若」誤作「差」。市「城」誤作「域」。**孔子沒後而弟子共論**—應 足 神 勝 蓬 寺「後」作「后」。萩「後而」誤作「而后」。久 無「後」。延 足 久 上「弟」作「才」。

5 **而記之也**—足 根 無「也」。**又曰云云**—神 風 久 寺 溯 上 東 泊「又曰」上無空格。根 刪「又曰」至「題目次第也」八十三字。**向者名也**—泊 市 無「者」。**尉安也**—泊「尉」下有「者」。

6 **校數中壘之軍衆**—久 脫「數」。風「之」誤作「也」。**漢世學者**—市「世」誤作「也」。神 勝 蓬 寺「者」下有「也」。風「者」下衍「之」。**三本之異也**—市「也」誤作「之」。

7 **謂之魯論語**—溯「謂」誤作「論」。**題目次第也**—溯「也」上衍「矣」。**太子太傅**—泊「太子」作「大子」。神 勝 蓬 寺 東 盈 萩「太傅」作「大傅」。

8 **丞相韋賢**—「丞」應 足 盈 萩作「兼」、國 塙作「羕（羕）」。**及子玄成等**—泊 無「及」。**夏蕭及韋賢父子**—根「夏」下補「侯」。泊 無「及」。**凡四人**—市「凡」誤作「八」。

9 **又曰云云**—神「又曰」作「又云」。上泊「又曰」上無空格。根刪「又曰」至「龔奮也」三十五字。**太子者漢武帝**—萩「太子」作「大子」。市「者」誤作「君」。**太子太傅**—延神勝蓬靑寺溯盈「太傅」作「大傅」。**龔奮**—文淸神勝蓬寺溯京泊盈誤作「龔舊（旧）」。應德國延足風久久靑上東戶萩新誤作「龍共舊（旧）」三字。槻誤作「龔共旧」三字。市誤作「龍共四」三字。今從漢書藝文志作「龔奮」。武內校勘記云「按龍共龔字誤爲二字者、旧舊字省體、舊奮形相近、故龔奮訛爲龔舊、又誤爲龔旧、爲龍共旧也」是也。

10 **其二十篇中章句**—萩「十」誤作「子」。

11 **猶是弟子所記**—京「猶」誤作「獨」。德延足久上「弟」作「才」。靑市萩「記」作「說」。**既傳之異代**—市「異」字空缺。**遂長有二篇也**—市「有」作「者」。

12 **又曰云云**—應德足久市萩「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「而說之也」五十九字。萩脫「者齊人所引」至「二十篇前」二十字。**齊論則其中二十篇**—文脫「齊」。神勝蓬無「中」。寺「中」誤作「其」。

13 **前題目次第云々**—延「前」下「題」上有一字、漫漶不可讀。萩誤重「題目次第」至「時習也」十六字。**爲自習也**—市「爲」誤作「篇」。**古之解書**—勝蓬無「之」。**而說之也**—溯上無「而」。神勝蓬寺「而」下有「記」。溯「之」下有「云」。盈無「也」。**瑯琊**—戶「瑯琊」作「琅邪」。「琊」東作「耶」、根作「琊」。

15 **亦用持教授於世也**—根「用持」改作「以」一字。「持」疑衍。後人「用」之旁記「持」以解之、鈔手無識兩存之也。國盈「持」作「特」。風無「也」。**王等三人**—市「三」誤作「一」。

16 **世故有魯齊二論**—應國足盈市萩根無「世」、近是。溯東「論」誤作「篇」。**雙立也**—神誤重「雙」。**又曰云云**—德國足風久久盈市萩「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「以

17 教授也」五十八字。**王者氏也**—神無「也」。**尊之號也**—市「也」誤作「之」。**佐於中壘校尉者也**—泊無「於」。**吉者名**—市萩「者」下有「亦」。國「名」下有「也」。**瑯琊**—槻延久青溯上戸市新同。德作「良耶」。其他鈔本及武作「郎耶」。於皇侃自序、諸本皆作「瑯琊」、此亦當作「瑯琊」。**膠東**—久「膠」誤作「繆」。**昌邑中尉王吉**—盈「邑」誤作「也」。市「吉」誤作「言」。**以教授也**—神勝蓬風寺溯上「以」上有「皆」。盈「以」誤作「名」。市「教」誤作「敢」。

18 **以孔子宅爲宮**—東「宮」誤作「官」。**壞得古文論語**—槻東「壞」作「懷」。**名餘**—延「餘」誤作「朝」。**魯恭王**—德久盈脫「魯」。

19 **好治宮室**—國盈「好」作「始」。**壞孔子舊宅**—東「壞」誤作「懷」。**以廣其宮**—溯「宮」作「居」。**又曰云云**—德國久盈「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「致此異邪」六十字。

20 **壞孔子之宅**—東「壞」誤作「懷」。**於屋壁所得也**—市「也」誤作「之」。**案此論語似孔子撰集**—神勝蓬寺「案」作「按」。青「似」誤作「以」。**將亦遇秦焚書**—溯無「亦」。

21 **口所授**—萩「授」誤作「援」。**致此異邪**—文延青上戸新「邪」作「耶」。**既有三論**—戸「論」上衍「篇」。

22 **齊論長有二篇**—市「論」誤作「命」。**魯論二篇也**—市「二」誤作「三」。**又曰云云**—應德足風久萩「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「亦微異也」二十五字。**二篇內辭句**—延「辭」誤作「故」。

23 **亦微異也**—戸「微」誤作「徵」。**齊非唯長魯論二篇**—溯無「唯」。萩「唯」作「惟」。**亦長於古論**—德國風久泊盈「亦」上有「而」。上「亦」下衍「此」。

24 **又曰云云**—應德國足風久久盈「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「同準也」十四字。**同準也**—溯無「也」。

25 **問王知道二篇**—京「二」誤作「一」。**而分堯曰**—槻延青上新「而」作「亦」。**後子張問於孔子曰**—「後」德國神風久青上戶盈新根同。其他鈔本及武作「后」。泊無「曰」。

26 **又別題爲一篇也**—文清溯東京武「題」作「顯」。神「題」上有「顯」。勝「題」下有「顯」。蓬誤重「題」。寺「題」下有「是」。溯「也」上衍「云」。**又一是子張問孔子**—國「一」誤作「二」。

27 **故凡論中**—市「凡」誤作「八」。**故凡成二十一篇也**—德「二十」作「廿」。

28 **又曰云云**—德國久盈「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「其餘甚多也」一百二十六字。**有孔安注**—青「安」誤作「子」。國久盈市「安」下有「國」、或是。**篇次第不與齊魯同**—「魯」市誤作「命」、泊萩誤作「論」。市萩「同」誤作「曰」。**古文凡二十一篇**—國盈「二十」作「廿」。**而次第大不同**—槻青溯上新「第」作「篇」。**以雍也爲第三**—萩「雍」下衍「之」。

29 **其微子篇無巧言章**—德文槻清風久久京泊「其」上衍「昔」。應足市萩「其」上空一格。延戶「其」誤作「昔」。武內校勘記云「按昔其字形相似、故舊本其字或誤作昔、至後人校改旁記其字、而鈔手轉寫併所校改而存之、故致有此誤也」近是。應德文足清久東市萩「巧」誤作「功」。**子罕篇無主忠信章**—萩「罕」誤作「下」。**無君子恥其言章**—德「恥」誤作「取」。

30 **子不食於喪側章**—鈔本皆有「子」。武脫「子」。文「側」誤作「測」。**鄉黨篇無色斯擧矣**—應足誤重「無」。東脫「斯」。**子路供之**—「供之」風久武同。國神勝蓬寺溯東泊盈作「供也」。應德槻延足清久青上京戶市萩新作「拱也」。文作「拱子」。諸本於鄉黨篇作「供之」、此亦當作「供之」。**三臭而立作文**—

諸本同。戶誤重「作」。「立」疑衍。武內校勘記云「鄉黨篇無立字、按皇侃原本此條亦黨作三臭而作、立作義同、故後人作字之旁記立字以解之、鈔手無識兩存之也」是也。

31 **其餘甚多也**—德誤重「其餘」、脫「甚」。溯無「也」。**故云不與齊魯論同也**—延「云」作「曰」。溯「也」作「云之也矣」四字。上無「也」。

32 **善者從之**—盈「善」誤作「盖」。塙脫「者」。

33 **於二論之中**—青泊新「論」誤作「篇」。**擇善者抄集**—市「擇」誤作「釋」。

34 **又曰云云**—應德國足久盈「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「張侯論也」四十七字。**安昌侯張禹**—蓬寺「昌」誤作「章」。**兼說齊論**—風久泊「說」作「講」。**又問庸生吉等**—諸鈔本同。久武「吉」上有「王」。今暫從諸鈔本不妄補。**擇其善者而從之**—市「擇」誤作「釋」。武脫「而」。

35 **此論既擇齊魯之善**—文無「既」。清「既」字空缺。**合以爲一論**—槻延青上戶新「以」作「此」。萩「以」誤作「双」。**貴重於張侯論也**—國「也」下衍「矣」。

36 **苞氏周氏**—市「苞」作「包」。**章句出焉**—國盈無「焉」。**苞氏苞咸也**—市兩「苞」皆作「包」。**周氏不悉其名也**—神勝蓬風久泊「悉」作「審」。

37 **苞周二人**—市「苞」作「包」。**分斷章句也**—溯「也」上衍「云」。

38 **注解於古論也**—市「注」誤作「匡」。**又曰云云**—久「又曰」作「又云」。應德國足神勝蓬風久寺盈「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「文字解之耳」二十一字。**漢武帝時之人也**—溯無「之」。**訓說者文字解之耳**—上無「者」、「耳」下衍「也」。溯「耳」上衍「云」。

39 **孔注古文之論也**—上無「之」。溯「也」上衍「云」。**至順帝之時**—德塙無「之」。**南郡太守**—應足溯萩

40 「郡」誤作「群」。久 塙 市「太守」作「大守」。

後有馬氏—寺 泊 市 萩「後」作「后」。德 國 戸 盈「後」下有「漢」。根「後」作「漢」。**亦注張禹魯論也**—德「禹」作「侯」。溯「也」上衍「云」。泊 無「也」。**大司農**—文 槻 延 清 神 勝 蓬 寺 京 市 武 同。其他鈔本及 根 作「太司農」。

41 **及考校齊古二論**—新「校」字空缺。

42 **又曰云云**—應 德 國 足 神 勝 蓬 久 寺 盈 萩「又曰」上有空格。其他鈔本及 武 無空格。當空一格。根 刪「又曰」至「謙不必是之辭也」五十字。**解書皆言傳**—市「皆」誤作「者」。**傳先師之義也**—青 戸 新「師」誤作「儒」。萩「之」誤作「師」。**後漢以還**—勝 蓬 寺 泊「後」作「后」。萩「還」誤作「述」。

43 **解書皆言注**—文 誤重「解」。國「皆言」誤作「此書」。**注己之意於經文之下**—足 溯「注」下誤重「注」。市「注」之上衍「言」。**陳羣**—延 勝 蓬 風 久 寺 上 東 泊 盈 新 誤作「陳郡」。**太常**—神 勝 蓬 寺 溯 泊 盈 萩 作「大常」。

44 **皆爲之義說**—塙 無「之」。**此三人共魏人也**—風「三」誤作「二」。**亦皆爲張論作注說也**—武 脫「皆」。市 萩「說」誤作「記」。**又曰云云**—應 德 國 足 風 久 久 盈「又曰」上有空格。其他鈔本及 武 無空格。當空一格。根 刪「又曰」至「解其義也」四十四字。

45 **近今之世辭也**—延「今」誤作「者」。**而今不爲**—應 足 溯 上 市 萩「爲」下有「司空」、或是。**故司空也**—應 足 久 萩「故」誤作「古」。德 脫「故」。**太常者掌天下之書官名也**—溯 上 泊「太常」作「大常」。東「者」誤作「世」。新 脫「之」。東「官」誤作「宮」。**義說者**—溯 無「者」。**解其義也**—槻 神 勝 蓬 久 寺 東 京 萩 同。文 延 清 青 溯 上 戸 市 新 武 無「也」。應 德 國 足 風 久 泊 盈「義」下有「之也」二字。當「義」下有

「也」一字。武内校勘記云「蓋舊本也字或誤作之、後人旁記也字以改、抄手兩存之、遂衍之字也」是也。

46 **不爲之訓解**—德 塙 無「之」。**乃相傳師受不同**—延「受」作「說」。

47 **中間謂苞氏孔周馬之徒**—市「苞」作「包」。根 刪「氏」。久「馬」下補「王陳鄭」三字。

48 **非一家也**—溯「也」上衍「云」。

49 **既注者多門**—市「注」誤作「往」。國 足 神 勝 蓬 風 久 寺 泊 根「門」誤作「聞」。盈「門」字空缺。**諸家之善說**—溯「諸」誤作「詩」。**此平叔用意也**—「用」文 清 誤作「同」、京 誤作「周」。

50 **互有得失而已**—諸鈔本同。青 溯 上 新「而已」屬下句。根 武「已」改作「己」、「而已」屬下句。今暫從諸鈔本。**著於集注中也**—文「著」誤作「者」。溯「也」上衍「云」。

51 **若先儒注非何意所安者**—風「若」誤作「著」。國 風 久 泊「注」下有「解」。武「所」誤作「取」。**下己意也**—市「也」誤作「之」。

52 **既集用諸注以解此書**—文 延 清 無「用諸」二字。其他鈔本及根 皆有「用諸」二字。武 從 文 刪「用諸」二字、恐非。**又曰云云**—應 德 國 足 風 久 久 盈 萩「又曰」上有空格。其他鈔本及武 無空格。當空一格。根 刪「又曰」至「名曰集解」三十八字。**又因魯論本文**—市 萩「因」誤作「曰」。

53 **及下己意**—神「及」誤作「曰」。**名曰集解**—國「曰」下有「論語」二字。國 神 勝 蓬 風 寺 溯 上「解」下有「也」。**光祿大夫關內侯**—上 萩 新 根「大夫」作「太夫」。**孫邕**—萩「邕」誤作「苞」。**光祿大夫臣鄭仲**—上 萩 根「大夫」作「太夫」。「仲」德 塙 戶 作「沖」、根 作「沖」。

54 **臣曹義**—根「義」作「羲」。

56 **孫邕等五人**—根「五」改作「四」。**共上此集解之論也**—萩「共」誤作「其」。新 脫「解」。上 脫「之」。**又曰**

57

云云—應德國足久盈萩「又曰」上有空格。其他鈔本及武無空格。當空一格。根刪「又曰」至「故謂之集解也」一百十七字。**光祿者掌祩祿之官**—萩「祿」誤作「錄」。市「祩」誤作「釋」。槻青上戸新「之」誤作「人」。**故曰光祿大夫也**—泊脫「光祿」二字。萩「大夫」作「太夫」。**散騎者**—德「散」上空一格。

古以四馬爲乘也—市「乘」誤作「來」。**常侍仲者**—德「常」上空一格。**掌內仕之官長也**—溯「掌」誤作「常」。溯東市萩「仕」誤作「任」。**領軍世上書之官長也**—德「領」上空二格。泊「世」作「者」。市萩脫「上」。青「書之」誤倒。上新脫「之」。**駙馬掌官馬官名也**—應「駙」上衍「騎」。萩「駙」誤作「騎」。德市「官馬」誤作「宮馬」。槻青戸新「官馬」誤倒。「官名也」青作「之名也」、武作「名也」。

58

都尉兼總諸壘中之軍衆—戸「總」誤作「絶」。市萩「諸」下衍「置」。**故曰**—上脫「故」。**何晏云云**—應德文國槻足清神勝蓬風久久寺京盈萩「何晏」上有空格。其他鈔本及武無空格。此文不當在此處、疑後人所旁記、鈔手空一格而轉寫之。「何晏」下疑有誤脫。據皇侃自序「何晏字平叔。因魯論集季長等七家。又採古論孔注。又自下己意」之文及上文「何晏又因魯論本文。集此七家。兼取古文孔安國。及下己意。名曰集解」而「何晏」下當補「集」。武內校勘記亦據釋文疑脫集字。**苞氏**—市「苞」作「包」。**陳羣**—槻神勝蓬風久久青寺上京戸泊新「羣」誤作「郡」。

59

周生烈義示己意思—德國槻清青溯上戸盈新同。應足市萩「義」下有「等」。文神勝蓬風久久寺東京泊「示」作「等」。延誤重「示」。武「示」作「下」、近是。但「示己意思」亦通。今暫從德等鈔本不妄改。**故謂之集解也**—盈「集」誤作「義」。

青新末行有「論語義疏卷第一　梁國子助教吳郡皇侃撰」十七字。

（本稿は平成十八年度科学研究費補助金基盤研究（C）による研究成果の一部である）